

〔奨励部門〕

1. 氏名 江里 朋子 (截金作家)
2. 年齢 52歳 ※R6.10.10現在
3. 住所 福岡市



【経歴及び選考理由】

截金とは、純金箔やプラチナ箔を数枚焼き合わせ、厚みをもたせたものを鹿皮の盤の上で竹刀にて細く線状、または、丸・三角・四角などに切り、それを筆端につけて貼りながら種々なる文様を描き出す技法である。

6世紀に仏教とともに大陸より伝えられ、仏像・仏画などで、仏様や菩薩様が身に着ける着衣や甲冑などの織物や金工、革の文様を表すことから始まり、仏教美術における仏様や仏様の素晴らしさを讃嘆して飾り立てるという意味の「荘厳（しょうごん）」するための技法として発展した。

13世紀頃には他の仏教美術とともに頂点を極めるが、次第に仏教美術の凋落、金泥技法の出現などで、截金の手法は衰退。近世以降は、東西両本願寺の庇護のもと少数の截金師により伝承されてきた。

その截金の技法を一般に広めるため、茶道具や工芸品に展開し創作を重ね、その功績が認められ国の重要無形文化財「截金」保持者に認定された截金作家の一人が、氏の母、佐代子氏である。

氏は、京都芸術短期大学卒業後、人間国宝である母に師事し、截金制作を始める。父は、仏様の姿を木に刻む仏師、江里 康慧氏であり、氏の出発点は父が彫った仏像に装飾を施すことであった。

平成13年からは、夫の故郷である福岡に移住。母の技術を受け継ぎ、仏像や仏画の加飾荘厳として用いられる截金技術を工芸品や建築装飾に展開し、飾管や茶道具、欄間装飾など截金の可能性を拓ける魅力的な作品を創作し続けている。

創作の拠点は福岡にありながら、今も京都で仏像作品に取り組んでいる。福岡と京都を行き来しながら創作活動を行うことについて、氏は、「温故知新／温故＝京都、知新＝福岡」に例え、京都で古いものから勉強をして、福岡でより新しいものを探っていくという良いバランスで創作活動を行っているとする。

平成23年には、「日本伝統工芸展」に初出品した「截金飾箱『皓華』」で「日本工芸会新人賞」を受賞。平成31年には、「西部伝統工芸展」に出品した「截金飾管『憧憬』」で最高賞である「朝日新聞社大賞」、令和6年日本伝統工芸展にて「日本工芸会奨励賞」を受賞するなど、多くの公募展において数々の賞を受賞している。

さらに平成31年には、九州歴史資料館において、子ども向け截金体験講座を開催。参加した小学5、6年生ら約20人に対し、截金の歴史や工程の紹介、制作指導等を行うなど、截金の世界を多くの方に知ってもらうための活動を行っている。

このように氏は、福岡を拠点として、世界的にも希少な截金の伝承・発信を行っており、今後の活躍が大いに期待される。

【主な受賞歴】

- 第58回日本伝統工芸展 日本工芸会新人賞 (平成23年)
- 第48回西部伝統工芸展 九州朝日放送賞 (平成25年)
- 第27回伝統工芸諸工芸展 日本工芸会賞 (平成31年)
- 第54回西部伝統工芸展 朝日新聞社大賞 (平成31年)
- 京都府文化賞 奨励賞 (令和2年)
- 第55回西部伝統工芸展 日本工芸会西部支部長賞 (令和3年)
- 第56回西部伝統工芸展 日本工芸会西部支部長賞 (令和4年)
- 第57回西部伝統工芸展 KKB鹿児島放送賞 (令和5年)
- 第58回西部伝統工芸展 福岡市長賞 (令和6年)
- 第71回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞 (令和6年)

【主な活動】

- 截金四季模様欄間作成 (京都市 わざ永々棟) (平成22年)
- 截金鳳凰文様欄間作成 (福岡市 料亭嵯峨野) (平成23年)
- 截金額装「花の宴」作成 (京都市 THE BLOSSOM KYOTO) (令和4年)



きりかねがざりぼこ しょうけい
「截金飾箱『憧憬』」
西部伝統工芸展
朝日新聞社大賞 (平成31年)



きりかねがざりぼこ そら しら
「截金飾箱『宙の調べ』」
日本工芸展
日本工芸会奨励大賞 (令和6年)
画像提供：(公社)日本工芸会

(参考)

奨励部門：個性的・創造的な創作活動を行い、かつ、将来一層の活躍が期待されるもの